



一般社団法人（非営利）アジア自立支援機構

2024 年度事業報告

(期間：2024 年 4 月 1 日—2025 年 3 月 31 日)

目次

| | 頁 |
|--|----|
| 1. 2024 年度の活動の概要と収支報告 | 2 |
| 2. 2024 年度に実施した事業の詳細 | |
| 2.1 タイ北部メーチャンタイ村における村民の自助努力によるコー ヒーを中心とした農業生産組合支援事業 | 4 |
| 2.2 メーチャンタイ村へのコーヒー販売促進支援事業 | 7 |
| 2.3 タイ北部メーチャンタイ村へのスタディツアー | 7 |
| 2.4 タイ北部チェンダオ、バンパライ村の女性グループ支援事業 | 9 |
| 2.5 タイでのその他の活動 | 10 |
| 2.6 その他の活動 | 11 |
| 3. 法人の組織や管理運営能力の強化に対する取り組み | 11 |
| 4. 法人の財政や資金に関する業務 | 12 |

1. 2024 年度の活動の概要と収支報告

2024 年度期（2024 年 4 月 1 日から 2025 年 3 月 31 日）、当法人の活動の主体はタイ北部チェンライ県、アカ族のメーキアンタイ村におけるアラビカコーヒー豆の生産、加工、販売支援事業、そして自助努力による村落コミュニティの活性化と互助努力支援事業などが中心になり、前年度よりさらに支援活動が強化された。同時に、当法人が支援し、メーキアンタイ村が主体となり経営されているコーヒー販売促進やメーキアンタイコーヒーの知名度向上、ブランド化を目指すアンテナショップ（バンコクのサトーン地区に 2021 年 2 月に開設されたアカメーキアンタイコーヒーショップ）の経営が軌道に乗ってきた。平均で一日 100 人程の来客数があり、収益も増加し、月により多少の差はあるが、赤字経営からほぼ脱出することに成功した。これと並行して、チェンマイ県チェンダオ郡バンパライ村アカ族コミュニティの女性伝統民芸品製作組合に対する支援も、前年から更に強化された。この二つのアカ族の村へのスタディツア（一泊 2 日）参加者の合計が 2024 年度に約 70 人。参加者の累計は、スタディツア事業が開始された 2019 年から数えると約 200 人に達した。バングラデシュにおける小規模農民に対する支援事業は、事前調査、ベースラインスタディが終了し、JICA 草の根技術協力支援事業案の概要がある程度完成したものの、パートナーである現地 NGO との調整やその他の要因で、事業案作成の継続を断念した。2024 年度の法人の収支の詳細は、別途、会計報告書に詳細があるので、ここでは省略するが、その概略は以下である。

予算総額 4,708,543 円（寄付金等の経常収益 3,222,749 円と前年度繰越金等 の合計）

支出総額 3,148,379 円（海外口座分を含む）

残高 1,560,164 円（円口座残高 1,472,488 円と海外口座残高 87,676 円 = 20,678.25 パーツ）

この残高は次年度への繰越金として 2025 年度予算の一部に加えられた。

予算総額の内訳は以下であった。

前年度からの繰越金等（海外口座分を含む） 1,485,794 円

受取寄付金 3,176,500 円

受取会費 40,000 円

受取利息 6,249 円

予算の合計 4,708,543 円

支出総額の活動別内訳は以下であった（詳細は会計報告書を参照）。

タイ北部コーヒー支援事業 1,701,602 円

タイスタディツアー支援事業 523,543 円

タイチェンダオ女性グループ支援事業 189,995 円

タイにおけるその他の事業 87,124 円

その他の事業費 223,448 円

その他の経費・管理費 22,667 円

支出の合計 3,148,379 円

2. 2024 年度に実施した事業の詳細

2.1. タイ北部メーチャンタイ村における村民の自助努力によるコーヒーの生産、加工、販売を中心とした村の生産組合（Community Enterprise）支援事業

2024 年度（2023 年 12 月から 2024 年 4 月期に摘み取られた分）のメーチャンタイ村（総計 42 戸のコーヒー農家）のコーヒー果実（Cherry）の生産量は推計で 700 トンであった。乾燥後のペーチメントコーヒー（殻付きのコーヒー豆）の重量に換算すると約 140 トンと推計されている。前年 2023 年度の生産量（果実で 600 トン）と比べると約 15% 増収した。主な理由として、2023 年度のコーヒー豆成長期の夏に良い天候や適時の降雨に恵まれたこと、コーヒー相場の高止まりが続き、農民達の生産意欲が増強されたことなどが主な要因と思われる。その反面、2025 年度（2024 年 12 月から 2025 年 4 月摘み取り分）の果実の生産量は、2024 年夏に降雨が少なく猛暑だった為、コーヒーの花の開花や果実の成長に悪影響を及ぼし、約 500 トン（2024 年度より約 30% 減少）に落ち込むと予想されている。一部だが、こうしたタイでの減産の影響やブラジルを中心とする世界的なコーヒー豆の不作や価格高騰の影響は、2025 年度に、タイのコーヒー豆の更なる高騰に波及するものと推測される。

メーチャンタイ村における 2023-2024 年度のコーヒーコーヒー生豆（水洗式）の生産者価格は、1 キロ当たり約 300 バーツで、仲買人や加工業者と取引された。これは、2021 年の 180 バーツに比べると 2-3 年間に約 65% 上昇したことになる。この価格の急騰は、農民達に多くの利益をもたらした。事実、多くの農家が家の増改築を行ったり、新車を購入したり、海外旅行をしたりするゆとりを持つたたことでも実証される。2025 年度の生豆（水洗式）の価格は 1 キロ 300 バーツで高止まりするか、あるいは、国際市場の動向を見る

と、更に上昇する可能性がある。将来の世界的なコーヒー需要の伸びや、標高 1400—1500 メートルのメーチャンタイ村で産出される良質なアラビカコーヒーの知名度や需要の増加を考えると、今後、少なくとも数年にわたり、メーチャンタイコーヒーの生産者価格は上昇を続けるものと推測される。

その反面、西暦 2000 年ごろに植えられたコーヒーの苗木の多くは、現在樹齢 25 年前後になり、コーヒーの木の生産性が一番高いと思われる時期か、既にそれを過ぎた樹齢に達している。村人の話では、古い木の一部は既に枯れて倒れているという。このままだと、コーヒーの生産量が徐々に下がり、近い将来、大きな問題になるだろう。新しい苗木、それも優良アラビカ品種（例えば Gesha, Catura, Tipica, Yellow Bourbon など）の苗木を生産、或いは入手し、夏の雨季にかけて、早急に植林することを一番の優先順位に置く必要が有る。

2024 年度は、コーヒー残渣（主にコーヒー豆の果肉や殻）を利用して、有機肥料（堆肥）を作成する試験的取り組みを始めた。この事業は 2025 年度に引き継がれ、村をあげての有機コーヒー生産の足掛かりとなることが期待されている。又、当法人とメーチャンタイ村との共同出資による事業として、村の水道水大型貯水槽の建設が始まった。

生豆の生産者価格やコーヒー豆の生産量の増加は、農家の収入増加に確実に貢献した。村人たちからの聞き取り調査をベースに考察すると、村のコーヒー農家一戸当たりの平均収入は、2018 年で年 150,000 バーツ程、それから 6 年余りで、2024 年度には年 300,000 バーツ（約 126 万円）と倍増した。

当法人のメーチャンタイ村に対する、自助努力による持続可能な村落コミュニティの発展を支援する事業の成功度合いを判断する上で、2つ大きな Indicators がある。1つは、前述したように、村人一戸当たりの平均年収の推移であり、2つ目は、村のコミュニティが共同管理するコミュニティーファンド（村の共同基金）の蓄積度合いと、その基金の、村での公共利用状況（社会福祉、環境保全、共同の経済活動など）である。電気はなく、道路の整備も遅れ、公共の水道もなく、長い間、政府の公的支援から取り残されてきた（Under-served）こうした山間地の山岳民族が、自分達のコミュニティの生活レベルや質を高めるには、自分達で立ち上がり、自分達の共同基金をつくり、政府や他人に頼らなくとも、その基金を有効利用して自力で自分達の村を良くしようという、持続可能な村落コミュニティの形成を（development of sustainable community）、後ろから支援する事を当法人の事業の中心においている。

このメーチャンタイ村の共同基金は、当法人が寄贈し、村のコーヒー共同加工場に設置されたコーヒー豆の脱穀機と焙煎機を使用するときに、その使用料として村人が支払った中から、オペレーターの給料や機械の維持管理費を除いた金額を基金に蓄積し、それを公共目的に利用・再利用する回転基金（Revolving Fund）として機能している。2023 年度に蓄積された共同基金の額は 57,725 バーツだった。コーヒーの脱穀機や焙煎機の使用頻度が増えたことから、2024 年度の蓄積額は 127,617 バーツ（約 54 万円）に倍増された。その中から、村の道路整備費用や、村の森野地の山火事延焼防止ベルトの建設などの公共目的に支出された後、2024 年 12 月 31 日現在、共同基金の残高は 74,504 バーツ（約 32 万円）であった。共同基金の更なる拡充と効果的な公共利用を期待したい。

2.2. メーチャンタイコーヒー販売と知名度・ブランド化促進事業

メーチャンタイコーヒーの販売促進と知名度向上、ブランド化を図る目的でメーチャンタイ村が中心になり、バンコクの中心地、サトーン地区のエンパイアタワーにアカメーチャンタイコーヒーショップ＆マルチバーパススペースが 2021 年 2 月に開業した。当法人はこのコーヒーショップに対して、経営や技術上のアドバイスや支援を行った。また、日本へのコーヒー豆の販売に対して協力した。開店当初の 3 年間は、新型コロナウイルス蔓延の時期で、赤字経営が続いたが、2024 年に入り、黒字になる月が増え、一日の客数の平均も 100 人を越えた。毎月の売上額は 120 –130 万円前後になり、結果として、2024 年度は、赤字経営から脱脚し、ほぼ損失ゼロに転換した。他方、有名なタイ人のインフルエンサーの Reiko san の協力でユーチューブやインスタグラムなどのソーシアルメディアを活用し、メーチャンタイコーヒーの宣伝に力を注いだ。そのうち、アカメーチャンタイコーヒーショップと当法人の活動を紹介したユーチューブは 2 万回以上の再生回数があり、メーチャンタイコーヒーの宣伝に大きく貢献した。同時に、当法人の支援で、日本でメーチャンタイコーヒーを使用してくれるコーヒー店の発展に努めた。2024 年度は、東京に一軒、新潟に一軒、熊本に一軒、合計で 3 軒のコーヒー店でメーチャンタイコーヒーが飲めるようになった。

2.3. タイ北部へのスタディツアーリポート

2024 年度（2024 年 4 月 – 2025 年 3 月）、1 回目のスタディツアーリポートは 2024 年 8 月 24–25 日にメーチャンタイ村で行われた。総計 30 人の参加者があり、そのうち 19 人が日本

からの参加だった。立教大学文学部の河野ゼミの学生達 9 人と引率の先生 2 人がその中に含まれる。このツアーホテルでは（コーヒー豆の摘み取りの時期ではないので）、メーキャンタイ村で以前から栽培されているアッサム茶の茶摘み作業の手伝いが中心になった。

2 回目のスタディツアーホテルは 2025 年 1 月 11-12 日にメーキャンタイ村で行われた。このツアーホテルには合計 28 人の参加があり、日本からは 10 名の参加者があった。コーヒー豆の摘み取りの手伝いが主なボランティア作業だった。コーヒーの生産や加工、アカ族の伝統や生活を学ぶ機会の提供は、参加者達から歓迎され、充実したツアーホテルだった、との感想が多く寄せられた。ただ、ちょうど寒波の到来に遭遇し、夜や朝方の気温が摂氏 8 度前後まで下がり、寒さの為、よく眠らなかった参加者もいた。この点、将来の教訓として生かし、備える必要があると感じた。又、タイで有名なユーチューバーの Reiko さんが同行したことにより、メーキャンタイ村とメーキャンタイコーヒーを紹介するユーチューブが作成され、放映 1 か月ほどで 2000 回以上の再生があった。3 回目のスタディツアーホテルは、チェンマイ県チェンダオ郡バンパライ村のアカ族コミュニティへのスタディツアーホテルだった（2025 年 2 月 22-23 日）。主な目的はこの村でアカ族の伝統的刺技術による民芸品を作成する女性組合の活動を視察することと、その作業体験、そしてアカ族のコミュニティとの交流であった。又、近くのチェンダオ温泉の露天風呂を満喫する事が出来た。合計で 18 人の参加者があった。

当法人の財務上の負担を軽減するために、スタディツアーホテルの参加者達から、チェンライ空港（或いはチェンマイ空港）とメーキャンタイ村間の交通費（バスや 4 輪駆動車の費用）の実費一人当たり 1000 バーツを徴収した。将来は、村での宿泊費や食費も参加者の自己負担とする予定である。

こうした、当法人が企画運営した 3 つのスタディツアーアイテム以外に、日本の NPO である JIYU が日本で集めた使用済みのランドセルを、タイの僻地の子供たちに寄贈する活動に協力した。具体的にはチェンダオのバンパライ村アカコミュニティに、日本から来た JIYU のボランティアたち 14 名を案内して、その子供たち約 60 人に、ランドセルやノート、文具類を配布した。

2.4. チェンダオのバンパライ村アカ族コミュニティ女性組合に対する支援事業

バンパライ村のアカ族コミュニティの女性たちは、手縫いで作成した民芸品の作成や販売を促進するために、女性グループを立ち上げ、お互いに団結・協力する基礎をきづいた。

しかしながらコロナ禍の影響で民芸品の販売がダメージを受け、女性たちの収入は過去3年間で（2023年の時点で）半減した。こうした状況で、女性グループが、新たな民芸品の販売ルートや外部からの支援を模索している時に、IMPECT（タイの少数民族連絡協議会文化教育局）の紹介で当法人（GIAPSA）と出合った。

女性グループとの話し合いの結果、GIAPSAは、女性グループから民芸品を定期的に買取り、バンコクのメーチャンタイコーヒー店で販売したり、日本を含む海外への販売の手助けをすることでこの女性グループの支援につなげる事を決めた。

また、アカ族の伝統的手縫いの民芸品の宣伝・広報の支援や、女性グループが組織力を強化することで、持続可能な、自活自援による農村の女性たちのビジネスモデルの構築を支援することを長期的な目標とした。現時点では、女性グループが正式な生産者組合やCommunity Enterprise を立ち上げることや、グループ口座を開設して透明性の高い

会計管理に移行することに躊躇しているが、時間をかけて、それらの重要性を説得するつもりである。2025年2月の時点で、バンコクのアカメーチャンタイコーヒーショップは、合計で344点の民芸品をフェアアートレードの原則の下、この女性グループから購入し、一部店頭で現在売られているものを除き、その大半が販売された。又、一部は日本に輸出された。

2.5. タイでのその他の活動

昨年度に引き続き、タイのセーブフード事業やフードバンクへの取り組みを、VV Foundationに対するアドバイスを通じて継続した。この活動は、賞味期限が近い食品などを提供してくれる企業（大手のスーパーマーケット、コンビニストアー、ドーナツ業者）などの協力が得られ、食品を集め活動は順調に進展したが、それらを賞味期限内に配布する活動に、難しさが生じた。公共の身体障害者施設や孤児院、老人ホームなどにおいて、このフードバンクの取り組みは、政府の社会福祉活動の一部として組み込まれ、比較的順調だった。その反面、数が多く、政府の補助が僅かしか届かない村落部で暮らす貧しい人々や、身寄りのない老人達、知能・身体障害者の人たちにフードバンクの食料を賞味期限内に配布するには、多くのボランティアの手助けが必要になった。しかしながら、地方政府からの支援が得られず、ボランティア達の交通費や活動費を捻出することが出来ず、本来、最も注がなければならない活動が、置き去りにされてしまった。一時は、パイロット事業として、一部の地域に限り、当法人の予算でボランティア達の交通費や昼食代を提供しようと考えたが、地方政府や村の有力者たちからの積極的な反応や支援に対する強い要請が無く、支援活動の拡大を断念した。

タイにおけるその他の取り組みとして特記する必要が有るのは、2024年11月29日にタイ南部チャンタブリ県で開催された第12回持続可能な発展に向けた科学と技術の統合国際会議への協賛団体としての協力である。当法人の代表理事は、この国際会議の座長として選任された。又、この国際会議の開会及び閉会のスピーチを行い、食料安全保障や環境問題を克服する為の持続可能な科学技術の発展と若手科学者・研究者の育成の重要性を話した。

2.6. その他の活動

2024年度のその他の活動として重要な事業は、当法人の活動の啓蒙であった。特に、当法人が支援するメーチャンタイコーヒーの販売とブランド化促進、アカ族の伝統的手縫いによる民芸品の宣伝、そして試供品の提供など、当法人の支援活動の主旨や目的をソーシアルメディアや宣伝活動を通じて、啓蒙する機会に恵まれた。

3. 法人の組織や管理運営能力の強化に対する取り組み

前年度に引き続き、2024年度は、バンコクの当法人のアジア拠点を中心に実際の活動の大半が行われた。会計や税務処理をNPO会計基準に沿って、NPO会計ソフトの使用に切り替え、より会計や税務管理の向上を目指した。又、公認会計士の小沼卓也氏から、私的なアドバイスを頂いた。

2024年度は、長年、理事を引き受けてくれた筒井理事に代わり、山家又佑理事（元国連FAO獣医専門家）が理事として選任され就任されたが、御病気の為、突然他界さ

れた。山家又佑理事に代わり、八丁信正氏（近畿大学名誉教授）が理事に選任され、就任の承諾を得た。当法人の理事及び非常任理事は以下であり、貴重なご意見やアドバイスを頂いた。

常任理事

野口良造 京都大学教授、京都大学大学院農業研究科

八丁信正 近畿大学農学部 名誉教授 （2025年4月より）

非常任理事

加藤久和 明治大学副学長

田島淳史 筑波大学生命環境系名誉教授

4. 法人の財政や資金する業務

2024 年度の活動資金は法人職員からの年会費、代表理事や親族及び一般支援者達からの個人寄付金、預金口座利息、そして前年度からの繰越金等により 確保された。詳細は、会計報告書の総勘定元帳兼現金出納帳に記載された。